# 10［評論］　『の学問』

　十年ほど前に亡くなった仏教学者の中村氏は晩年、「奴隷の学問をやめよ」と叫んだ。私は、八十歳を超えた仏教学のオーソリティーである中村元氏がそのように語る勇気にａカンシンしたが、しかしもう少し早く氏はそう語るべきであったと思わざるを得なかった。

　私は最近、①明治以来の日本の人文科学、社会科学の多くは科学のを成していないとますます思うようになった。［　　１　　］私が大学で専攻した哲学についていえば、日本の哲学者のほとんどはプラトンやカントなどの哲学を研究し紹介することを一生の仕事としていて、その意味でプラトンやカントの［　　Ａ　　］であると言わざるを得ない。哲学とはやはり、世界とは何か、人間とは何かを自己の頭で深く考え、そのような思想にもとづいて独創的な体系を構築する学問であるべきである。このような哲学を創造した、いわば奴隷の学問をしなかった哲学者は、日本では西田、など数人にすぎない。

　［　　２　　］日本文学研究も、江戸時代にできた国学の奴隷であったといえる。たとえば『』研究においても、いまだ三百年前の、の学説を批判できないでいる。今でも高等学校では、『万葉集』はますらおぶりの歌風で、『集』はたおやめぶりの歌風であるという説が教えられている。これは、将軍徳川の息子、の家庭教師のような仕事をしていた真淵が、京都のの『古今和歌集』美学に対して、江戸の武士の美学を創り出そうとしたイデオロギーのｂサンブツである。

　②そのような美学を創り出すために真淵は、当然の歌と考えられる、どちらかといえばたおやめぶりの歌である「柿本人麻呂歌集」の歌を人麻呂作ではないとし、人麻呂の歌を「柿本人麻呂作歌」と記された歌にかぎるとする、文献学者としてはあるまじき暴挙を行った。［　　３　　］現在の日本文学学会においてもこのような真淵の暴挙ははっきり批判されていない。

　人文科学も社会科学も自然科学も、その学問の方法は同じである。そこにはそれまで真理とされてきた通説への根本的懐疑があり、そしてその懐疑の末に新しい説の直観があり、その直観された新説を［　　Ｂ　　］の方法によって粘り強く証明し、首尾一貫した学問体系を創造する。それは自然科学においてはごくあたりまえの方法であり、そのような方法によらない学問は認められない。しかるに日本の人文科学、社会科学にはそのような学問はほとんどなく、奴隷の学問が大手を振って通用している。

　私は若き日からこのような奴隷の学問を拒絶して、自己の学問を創造してきた。そして私は孤立ｃムエンを覚悟して、次々と新しい学説を発表してきたが、無私の真理のｄツイキュウがあればそれを認める人が必ず現れる。おかげで私は学者として生き続けてきた。八十三歳の今日もまだ新しい学問をする意欲は衰えていない。それはｅ甚だ幸福なことであるとつくづく私は思っている。

問１　二重傍線部ａ〜ｅの漢字は読みを記し、カタカナは漢字に直せ。2点×5

ａ〔　　　　　〕　ｂ〔　　　　　〕　ｃ〔　　　　　〕　ｄ〔　　　　　〕　ｅ〔　　　　　〕

問２　空欄1〜3に入る適当な語句を次から選べ。3点×3

ア　つまり　　イ　また　　　　ウ　したがって

エ　しかし　　オ　たとえば

1〔　　　〕　2〔　　　〕 3〔　　　〕

問３　傍線部①とあるが、筆者が考える「科学」のあり方を一五字以内で二つ説明せよ。6点×2

・〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

・〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問４　空欄Ａに入る最も適当な語句を本文中から抜き出せ。4点

〔　　　　　　　　　　〕

問５　傍線部②「そのような美学」とあるが、「美学」の具体的内容に当たる語を本文中から抜き出せ。4点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問６　空欄Ｂに入る最も適当な語句を次から選べ。4点

ア　理想と現実　　　イ　絶対と相対

ウ　と帰納　　　エ　肯定と否定

オ　主観と客観

〔　　　〕

問７　本文の内容と合致するものを次から一つ選べ。7点

ア　日本の自然科学研究は独創的な学問体系を確立し、世界的な評価を受けるに至っている。

イ　賀茂真淵の和歌研究には政治的な背景があり、真理のツイキュウからはほど遠いものであった。

ウ　世界や人間のあり方を創造した日本の哲学者は、プラトンやカントの思想に批判的であった。

エ　中村元氏の晩年の主張は、語る時期が遅すぎたものの、独創的で素晴らしい内容であった。

オ　独創的な学問体系の構築をめざして、私は孤独に耐えながらも多くの実績を残すことができた。

〔　　　〕

【解答】

問１　ａ感心　ｂ産物　ｃ無援　ｄ追究　ｅはなは（だ）

問２　１＝オ　２＝イ　３＝エ

問３　通説に批判的であること（通説への根本的懐疑を持つこと）

　　　自分で考え独創的であること（新説を粘り強く証明すること）

　　　（傍線部の内容がなければ×）（11・13・14字）

問４　奴隷

問５　ますらおぶり

問６　ウ

問７　イ

■覚えておきたい語句

□2　オーソリティー………その方面の大家。権威。

□4　体を成す………………それらしい体裁になる。

□20　懐疑……………………疑いをもつこと。あやぶむこと。

□21　首尾一貫………………考え方や態度などが矛盾なく終始すること。

〔要　約〕

具体例（［2］・［3］・［4］段落）や補足（［6］段落）を省き、柱の段落である［5］段落を中心に要約する（必要に応じて［2］段落の表現も加味する）。

　　　　↓

通説への根本的懐疑から新説の直観が生まれ、その新説を粘り強く証明することで、首尾一貫した学問体系を創造するのが学問の方法である。日本の人文科学、社会科学では自分の頭で考えない奴隷の学問が通用している。（100字）

〈筆者＆出典〉梅原　猛（うめはら・たけし）一九二五年（大正14）宮城県生まれ。哲学者。京都帝国大学文学部哲学科卒業。ものつくり大学総長。国際日本文化研究センター初代所長。梅原日本学と呼ばれる独自の世界を開拓。主著に『隠された十字架―法隆寺論』『の歌―柿本人磨論』『の告白』などがある。本文は、「奴隷の学問」『京都新聞』（二〇〇八年一〇月二〇日朝刊）より。

【読みのセオリー】

★論理の流れから文脈がわかる

　文相互の接続関係のパターン

①換言（前後がイコール＝関係）

②順接（前後が矢印→関係）

③付加（前後がプラス＋関係）

④逆接（前後が対立⇔関係）

は、文だけでなく、段落相互の関係としても把握できる。

　「文脈」とは、「論理の流れ」ということである。つまり、「換言」「順接」「付加」「逆接」の４パターンで文章全体をすることによって、文脈が把握できる。

　2段落から5段落にかけて「換言（言い換え）」の論理で話が展開しており、そのことが読みとれれば問３・５の解答に近づける。

■読みのセオリー［実践］論理の流れから文脈がわかる

問３

　①「明治以来の日本の人文科学、社会科学の多くは科学の体を成していない」

　　　　　＝

　［１　　　　］の学問

　　　　　↓それに対して、筆者はどうすべきであると述べているか。

２［２　　　　］ の頭で深く考え、［３　　　　］な体系を構築する学問であるべきである。

５　通説への［４　　　　］をもつ。

　［５　　　　］ を粘り強く証明する。

〔解答〕　１奴隷　２自己　３独創的　４根本的懐疑　５新説

☆「セオラム補充問題」　問題は、次の３種類があります。

　　＊差し替え　　　……該当の問と差し替えるもの

　　＊追加　　　　　……同じ問で、追加された問題

　　＊新問　　　　　……追加可能な新たな問題

＊差し替え

問２　空欄１〜３にあてはまる適語を次から一つずつ選べ。（１　３行目「しかし」、２　10行目「また」、３　10行目「たとえば」）

ア　したがって　　イ　また　　ウ　つまり　　エ　しかし　　オ　たとえば

［答］　１エ　２イ　３オ

＊差し替え

問３　22行目「そのような方法」とあるが、どのような方法か、本文の語句を用いて四○字以内で説明せよ。

［答］　通説への根本的懐疑と新説の証明により、首尾一貫した学問体系を創造する方法。（37字）